

## 主の公現

2010.1.3

(マタイ 2・1-12)

今日は主の公現の祭日です。今日の主の公現の祭日に祝われるのは、クリスマスの厩の飾りや、子供たちのクリスマスの劇などで私たちにもなじみ深い、今日の福音に語られている出来事です。私たちになじみ深いクリスマスの物語のこの一場面を、何故教会は「主の公現」というような多少とも仰々しい名前を持った祭日として祝うのかということについては、もう何度もお聞きになられた方も多いと思います。星の光に導かれて、東の国からはるばるやって来た異邦人の博士たちが、お生まれになられたイエスの前にひれ伏して拝み、贈り物をささげたことによって、クリスマスの夜、ベツレヘムの飼い葉桶に寝かされていたあの乳飲み子がどのようなお方であるのかが、初めて世界に知らされた、このことを祝うのが主の公現の祭りです。

今日の主の公現の祭日のことを、ラテン語ではエピファニアと呼びます。エピファニアということばはさらにギリシャ語のエピファネイアということばから来ているので、手元の新約ギリシャ語辞典で調べてみると、顕現とか出現という日本語が当てられていて、「特に目に見えぬ神が礼拝者に姿を現すか、または奇跡や不思議な出来事を通してその臨在を知らせるのに用いられた術語」という解説がつけられていました。エピファネイアの動詞形の意味は、示す、見せる、現れるとあり、形容詞では、現れる、顕著な、輝き出る、輝かしいということばが並んでいます。東の国から来た博士たちは、お生まれになったユダヤ人の王、つまりメシアを訪ねて自分たちのほうからイエスのもとにやって来ますが、その彼らの行動は、主のエピファニアの出来事であったと、今日の主の公現の祭日は私たちに告げているのです。エピファネイアとは、目に見えぬ神が礼拝者に姿を現すことという先程の辞典の解説を手がかりに考えると、博士たちは母マリアとともにおられる幼子イエスのうちに、目に見えぬ神の現われを見たから、その幼子の前にひれ伏して礼拝したのです。あるいは彼らを導く不思議な星の現われによって、幼子イエスのうちに神の現われを感じ取ったのです。いずれにしても、博士たちをイエスのもとに導いた、あの星の光はその星のもとにおられる神の子イエスから発する、輝かしい光の象徴でもあるのです。こうして今日祝う公現の出来事において、イエス・キリストはあの博士たちに、そして聖書を通してこの物語を味わう私たちに、ご自分を示されご自分を現しておられるのです。今日のミサをともにささげ、主の公現を祝う私たちも、こうして主の祭壇をのもとに集い、その祭壇で聖体を通してご自分を示しておられる主の前に、あの博士たちのように身を低くして、心の底からの礼拝をささげたいと思います。

今日の主の公現の祭日には毎年、今聴いた福音の箇所が朗読されます。主の公現の祭日に祝われるのは、東の国から来た博士たちが、幼子イエスを礼拝した、今日の福音が語る出来事だからですが、公現、エピファニアということことば自体は先程見たように、全ての人のためにこの世界に来られた神の御子がこの世界に住む人々に神からの光を輝かすことであるとするなら、その公現の出来事とそれが与える恵みと喜びは、今日の福音に登場する東に国から来た博士たちだけが経験したものではないと言えるのではないのでしょうか。

クリスマスの夜ベツレヘムの厩にお生まれくださった、神の御子を喜びのうちに迎えた全ての人々は主の公現を体験したとも言えるのではないのでしょうか。救い主の誕生を告げる天使のことばと、夜空を光で満たして神をたたえて歌う天使の群れの歌声を聞いて、飼い葉桶に眠る乳飲み子イエスを捜しに急いだ羊飼いたちも、主の公現の出来事を体験したのです。エルサレムの神殿にささげられる幼子イエスを母マリアの手から抱かせてもらった、シメオンとアンナの喜びに満ちたことばと歌も主の公現に接した人の喜びを伝えています。しかし、主の公現の出来事とそれが人々にもたらす神からの喜びは、イエスがまだ産まれたばかりの幼子であった時の出来事に限られたものではありません。

来週の日曜日は主の洗礼の祝日ですが、クリスマスの喜びを祝う教会の降誕節はそこまで続きます。大勢の人々に交じってヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになったイエスの上に、天の御父の声が響きます。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」イエスの上に響いたこの父なる神のことばによって、あの博士たちがその前にひれ伏して礼拝した幼子、羊飼いたちが飼い葉桶の中に寝かされているのを見た乳飲み子がどのようなお方であるのか、全ての人々の示されることになるのです。そしてこの洗礼によって開始されたイエスの福音宣教の活動の中でイエスと本当の意味で出会った全ての人々は、主の公現の出来事をその都度体験することになるのです。福音書に語られているイエスによって悪霊や病から解放された人々、目が見えるようにされ、耳が聴こえるようにされ、自分の足で立つことができるようにされ、死の国から生き返らされた全ての人々はイエスのうちに働く神の力の公現を体験したのです。そして、イエスに名指され、全てを捨ててイエスの後に従った弟子たちは、その全ての場に立ち会うことを許され、ついには十字架の上に死んだイエスの復活を体験することになるのです。今日の主の公現の祭日に祝う東の国の博士たちが体験した出来事は、こうして福音書に語られることの全ての始まりとなっていると言えます。そのような、イエス・キリストによってもたらされた、イエス・キリストのうちに働く神の力の現われ、その公現の最初の出来事の祝いとして、この公現の祭日を教会は祝っているのです。

そればかりではありません。今日の第二朗読のことばをよく味わうなら、主の

公現の出来事とは、つまり人間である私たちには誰も思いもつかなかったような、神の子イエス・キリストによって実現された、隠されていた神のご計画の現われ、エピファニアであることが分かります。そしてその最も偉大な神のご計画の実現、その公現はエフェソ書のことばによれば、「すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものを私たちと一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者なるということです」。自分は異邦人のための使徒として神に召されているとの確信のもとに、パウロがいのちをかけて宣伝した福音の核心がここに要約されています。

私たちは皆、それぞれの人生においてカトリックの教会と出会い、そこに伝えられているイエス・キリストの福音を受け入れ洗礼を受けて、キリストのからだである教会に属するものとされ、イエス・キリストの十字架の死と復活によってもたらされた罪のゆるしの恵みと神の子としての新しいいのちをこの身に注がれ、永遠のいのちの約束を受け継いだのです。ここに、神がその永遠の御心のうちに秘められていた、私たち全ての者のための永遠のご計画が実現された、現れているとエフェソ書は述べているのです。そのように考えるなら、今日の福音が語るあの東の国の異邦の博士たちは、私たち自身の姿を映し出していると言えます。私たちは皆、イエス・キリストの御前にひれ伏し、その洗礼の恵みあずかることによって、主の公現を体験した者たちです。私たちの教会は毎年、新しく洗礼を受ける人々を向かえて大きな喜びをともに味わってきました。洗礼式に立ち会うたびに私たちが味わうその喜びは、単に私たちの教会のメンバーが増えたということに留まるものではありません。私たちはその都度、こうしてまた新たな主の公現の現場に立ちあわせていただいている、主は今も私たちの中にそのエピファニアの出来事を続けていてくださる、外から来て、私たちの目の前で洗礼を受けて、主なる神が与えてくださった喜びを私たちに示してくれているその人たちは、クリスマスの羊飼いや、公現のあの博士たちのようだ、そのようにして神は今も私たちの中でエピファニアを実現し、私たちをその喜びで満たしてくださっている。教会は、今日の公現の祭日をそのように受け止め、盛大に祝ってきたのです。私たちも今日のミサにおいて、私たちのための神のエピファニアを喜びに満たされて祝いたいと思います。

カトリック高円寺教会

主任司祭 吉池好高